（第3種郵便物認可）　2024年(令和6年)9月26日（木曜日）　読売新聞

温かいご飯と居場所を

光と愛支援事業　敦賀の子ども食堂

開設9年「多くの支えのおかげ」

子どもの健全育成に取り組む団体を支援する読売光と愛の事業団の今年度の「子ども育成支援事業」に、県内から敦賀市の一般社団法人「青空」が選ばれた。2015年から月2回開いている「子ども食堂」の食材費に50万円が充てられる予定だ。代表理事の中村幸恵さん(58)は「地域の子どもに栄養のある食事を提供し、子どもが困ったことを相談できる場所を作りたい」と意気込む。（高山智仁）

子どもたちが安心できる居場所となっている「こども食堂青空」（敦賀市で）

中村さんは15年、県内初の子ども食堂となる「こども食堂青空」を開設した。自身が子育てをする中で育児に関する書籍を読み、子ども食堂の存在を知ったのがきっかけだった。

その頃、子どもを通わせた幼稚園の保護者らから「母親が病気で、一人でご飯を食べている子どもがいる」「両親が共働きで、子どもが菓子パンばかり食べている」といった話を耳にした。調理師の資格を持っていた中村さんは「敦賀でも大変なことになっている。子どもたちを何とかしたい」。いても立ってもいられず、敦賀市の担当者や民生委員らに相談を重ね、子ども食堂の開催にこぎ着けた。

現在は毎月第1、3火曜の午後4～8時に同市川崎町の会館を会場に開設。子どもたちに「この場所は安心できる」「ここに来れば、ちょっとしたことでも相談できる」と感じてもらえるよう、食事だけでなく、宿題をしたり遊んだりすることができる。

小中学生や高校生ら40人程度が参加。食材や食費は農家や市民、支援団体からの寄付で賄われ、これまでに社会福祉士や民生委員、保育士、大学生らがボランティアとして協力している。9年が過ぎ、子どもたちが安心できる居場所として定着し、市民らから「気軽に参加できる」と好評だ。

中村さんは「多くの人の支えのおかげで運営が続けられており、参加していた子どもが成長して運営側のスタッフになってくれたこともある。子どもの心身の健康のため、次世代にもこの場所をつなぎたい」と話している。

オンラインで何が見える？
ご登録はこちらから
読売新聞オンラインならいつでもカラー紙面
大阪本社版朝刊の各地域版

テックフォース4人能登派遣

石川県の能登
記録的な大雨を
福井河川国道事
の被害状況を調
災害対策派遣隊
の道路班4人を
テックフォー

光と愛子ども育成支援

府内から2団体

子どもたちの健全育成に取り組む団体を支援する、読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」に今年度、府内からは、無料塾で子どもの学習を支援する大阪市のNPO法人「ふらいおん」と、忠岡町で子ども食堂を運営する「にこにこ子ども食堂」が選ばれた。

2024年度の子ども育成支援事業は、読売光と愛の事業団の予算500万円に加え、事業の趣旨に賛同した読売巨人軍が100万円を寄付している。

NPO法人ふらいおん 大阪市

無料塾で学び支援

大学時代の経験をきっかけに、無料塾を運営してきた野田さん（大阪市で）

ふらいおんは2020年、副代表理事の野田風馬さん(25)ら大阪教育大の学生4人が設立した。大阪市内で小学生対象の無料学習塾を3校運営。経済的な理由で塾や習い事に通うことが難しい児童たちに、学びの機会を提供している。事業団からの助成金50万円は運営費に役立てる。

講師を学生ボランティアらが務め、全ての児童に目が行き届くよう、1人で受け持つ人数を2人ほどにとどめる。授業の後はボードゲームなどで一緒に遊ぶこともある。子どもたちの居場所をつくり、「楽しい時間を過ごしてほしい」との思いからだ。

野田さんは学生時代、教育実習などを通じて、親の収入による教育格差に触れ、「一人一人に適切な教育を届けたい」と思い立った。経済的に苦しい家庭だけでなく、不登校や障害など様々な事情を抱えた児童を受け入れてきた。

無料塾経営のノウハウを積極的に発信し、他団体の設立につながったケースもある。野田さんは「子どもたちの成長を間近で見られるのがうれしい。取り組みを全国に広げていきたい」と話している。

にこにこ子ども食堂 忠岡町

見守り 行政と連携

▲「子どもたちの『おいしかった』という声を聞くのが一番うれしい」と話る柿畑さん（右）と東さん（忠岡町で）

「にこにこ子ども食堂」代表の柿畑利美さん(66)は「子どもの笑顔と『おいしい』の声で、準備の疲れは吹っ飛びます」と語る。

毎月第3水曜の夕方。忠岡町役場南館1階の喫茶「サンルーム」に子どもたちが集まってくる。テーブルとカウンターはすぐ満席になり、ボランティアスタッフが配膳する食事を子どもたちがおいしそうにほおばった。

柿畑さんは1998年、町が町母子寡婦福祉会に提供したこの場所で喫茶を始めた。女手一つで子育てをした経験から、喫茶を「気軽な相談の場にしよう」と考え、営業時間外にも母親たちの悩み事を聞いた。

2018年、町の部長だった東祥子・町社会福祉協議会事務局長(63)と相談し、「地元への恩返しになれば」と、喫茶で子ども食堂を開くようになった。カレーやオムライスなど、子どもが喜ぶ手作りの温かいメニューを心がける。行政や社協との連携で、子どもらにこまめな見守りができるのも特徴だ。

助成金20万円は老朽化したガスコンロの買い替えに充てた。柿畑さんは「調理時間が短くなり、子どもたちを待たせることがなくなりそう」とほほ笑んだ。

2024年09月29日 読売西部 朝刊 山口 12版 31頁

光と愛の事業団 県内2団体助成

下関「キッチン はまゆう」　宇部「子ども劇場県センター」

読売光と愛の事業団は、子どもの健全な育成に取り組む団体を支援する「子ども育成支援事業」の助成先を決めた。県内からは2団体が選ばれ、「NPO法人子ども劇場県センター」（宇部市）に50万円、「キッチン はまゆう」（下関市）に20万円が贈られる。2024年度の子ども育成支援事業は、同事業団の予算500万円に加え、事業の趣旨に賛同した読売巨人軍が100万円を寄付している。

悩みに寄り添う電話相談

「子ども劇場県センター」は、18歳以下を対象にした専用電話相談窓口「チャイルドライン」の運営を20年にわたり続けている。いじめや不登校、親子関係、性など多様な相談が寄せられる。理事長の山田節子さん(76)は「話を聞いてあげることくらいしかできないが、悩みを持つ子どもらの心を少しでも軽くしてあげたい」と語る。

チャイルドラインは全国約70の団体が連携して運営。同センターは電話口で直接やりとりする「受け手」13人と、受け手の隣で一緒に考えたり受け手に助言したりする「支え手」2人が所属しており、担当する際は全国からの相談に対応する。

チャイルドラインの運営について職員と打ち合わせる理事長の山田さん（左）

同センターが2021年度に受けた相談は1276件。年齢などを把握できた相談者417人のうち、最も多かったのは高校生年代の278人で、中学生70人、小学校高学年45人、同低学年24人と続いた。内容は「リストカットをやめたいけどやめられない」「学校に行くのがつらい」「友達はいるけど一緒にいても孤独」「普通の家庭に生まれたかった」など多岐にわたる。

課題は受け手の確保だ。高齢化や負担の重さなどから減少しており、毎年、養成講座（全10回）を開講している。受講者は思春期の心と体や、ドメスティック・バイオレンス（DV）、発達障害などについて学び、対応力を身につける。

山田さんは「知り合いには相談しにくい悩みもある。電話をかけてくる子どもらの存在をしっかり認めて寄り添いたい。悩みについて一緒に考える大人が対応するので気軽に電話してほしい」と話している。

チャイルドライン（0120・99・7777）は連日、午後4～9時に相談を受け付けている。

◇

昼食提供 多世代交流の場

「多世代交流の場」づくりに尽力する共同代表の斎藤さん（左）と梶山さん

「キッチン はまゆう」は毎月第3土曜日、社会福祉法人松涛会が運営する特別養護老人ホーム・はまゆう苑（下関市横野町）の施設の地域交流ホームで「こども食堂」活動を行地元・安岡地区の子どに昼食を用意している。

同団体は2021年月、共同代表を務める会理事長・斎藤妙子さ(90)と安岡地区まちづく協議会の元会長・梶山江さん(77)を中心に地域有志が設立した。昼食は苑などで調理し、子どには無料、保護者ら大は200円で提供。スタッフとボランティアの30人は絵本の読み聞かせ学習支援、クリスマス催などにも取り組んでる。

特徴的なのは「多世代流の場」も掲げている。子どもや保護者のほか、齢者ら地域住民も気軽に を運んでおり、毎回80人度がランチタイムを楽む。斎藤さんは「こども堂の運営は大変な面もあ中、助成は本当にありがい」、梶山さんも「みで助成を喜び、季節感る食事をおいしくいただたい」と話している。

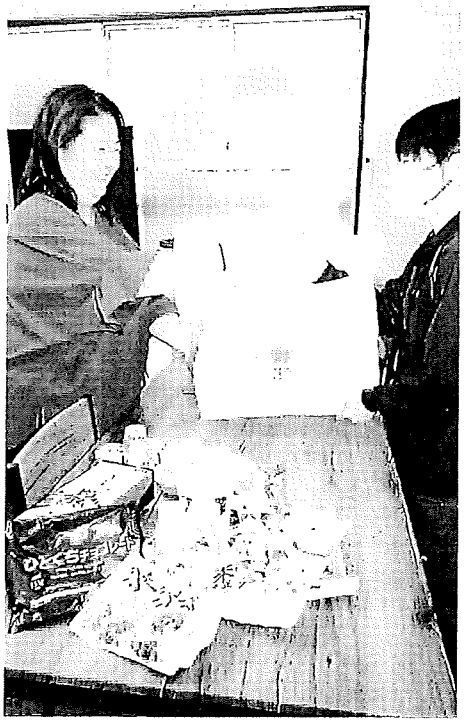
2024年09月28日 読売大阪 朝刊 愛媛 13版 27頁

西条の一人親支援へ助成

光と愛事業団

団体代表「第二の実家になれば」

読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」の今年度の助成先として、子ども食堂の運営や一人親支援活動に取り組む任意団体「イマココ子育て支援」（西条市）が選ばれた。助成金22万円は運営費に充てられる。



食料品などの支援物資を手渡す白石さん（左、西条市で）

「お米は足りてる？」「このお菓子、あの子が喜ぶと思って入れておいたよ」

25日夕、西条市役所近くの事務所で、白石小夜代表（57）が、仕事を終えて訪れる母親たちに食料品などを詰めた袋を手渡し、声を掛けて気を配る。

2019年11月、一人親として子育てを終えた人たちを中心に団体を設立。家庭の悩みを声に出せない人たちを気遣い、地域で子どもたちを育む場所にしたいと活動を始めた。団体に登録する約30の一人親家庭に食料品を支援し、子ども食堂も運営する。

代表の白石さんも一人親として長女を育て上げた。実家の協力に助けられたというが、誰もがそのような環境ではないといい、「団体を『第二の実家』のように思ってもらえたら」と奮闘。地元の農家が育てた野菜を譲ってもらったり、日中に弁当販売をした売り上げの一部を充てたりして切り盛りしている。

「助成金があると活動をより充実させられる」と今回の決定に感謝している。11月には団体をNPO化する意向で、「子どもの成長を応援する場所を作っていきたい」と意欲は尽きない。

◇

24年度の子ども育成支援事業は、読売光と愛の事業団の予算500万円に加え、事業の趣旨に賛同した読売巨人軍が100万円を寄付している。今回は15団体が助成先に選ばれた。

一憂え 安定願う

襲撃17年 今治で妹墓参

宮崎　2024年(令和6年)9月27日(金曜日)　読売西部

延岡の子ども食堂に助成

光と愛の事業団　市民団体「孤立なくす」

「子ども食堂でひとり親家庭の負担を減らしたい」と話す長池さん

読売光と愛の事業団の今年度の「子ども育成支援事業」の助成先に、県内から市民団体「子どもネットワークのべおか」（延岡市）が選ばれた。助成額は30万円で、同団体は延岡市内で運営する子ども食堂向けの食材購入や調理器具の購入などに充てるという。

同団体は2016年に設立。毎月第1土曜日に市内で子ども食堂を開設し、無料で食事を提供している。毎月約100食分の食材は活動に賛同する地元の食肉業者や食品店、個人などから提供してもらい、不足分は購入してスタッフが調理している。各家庭を訪問して食材を届ける子ども宅食も行っている。

子ども食堂や宅食の利用者は生活に困窮しているひとり親世帯が多い。事務を担当する長池友稀さん(29)は「一人で頑張っているお母さんたちの負担を少しでも減らしたい」と語る。

団体ではこのほか、夏休みに子どもたちが無料で利用できる学習支援教室の開催、不登校の子どもたちへの居場所の提供、一人暮らしを続ける延岡市の九州医療科学大の学生らに食料品などを届ける活動も行っている。

理事長の堀之内健吾さん(51)は「新型コロナ禍では人とのつながりが薄れ、頼るところがない人もいたが、最近では子ども食堂を利用してくれる親子連れもいる。これからも孤立をなくす活動を続けていきたい」と話した。

都城

肉や焼酎といった返礼品が人気でふるさと納税の寄付受け入れ額が2年連続で日本一となった都城市の食の魅力を楽しめる「日本一の肉と焼酎まつり」が29日午前10時～午後4時、同市で開かれる。

都城市と同市ふるさと納税振興協議会が「日本一となった都城市のふるさと納税について知ってほしい」と主催。中心市街地中核施設「Ｍｏｌｌｍｏｌｌ（まるま